

平成15年度新潟県観光協会魅力ある観光地づくり支援助成金交付対象事業
信濃川舟運観光ツアー—景観名所づくり基礎調査研究
概要報告書



平成16年3月

信濃川舟運観光調査研究会
信濃川ウォーターシャトル(株)・(株)グリーンシグマ共同研究

1. はじめに

当調査研究業務は、新潟県観光協会の平成15年度魅力ある観光地づくり支援助成を受けて行った調査研究である。この調査では、写真家弓納持福夫氏から著書「写真集『信濃川』」(新潟日報事業社発行)の一部の写真利用についてご協力頂いた。春の舟運ツアーで船上講演をして頂いた大河津資料館館長五百川清氏、新潟大学工学部教授大熊孝氏からは“信濃川八景”選定についてのご指導を頂いた。また、春の舟運ツアーでご一緒させて頂いた松井ヒロさんからは俳句使用のご協力を頂いた。

1.1 調査研究の目的

- ・ 信濃川舟運観光の向上を目的とし、信濃川の下流域周辺に残る自然、農村、都市郊外から河口港町の都市に至る四季折々の河川景観の魅力を、川側から再発見し観光名所づくりの基礎資料とする。

1.2 調査研究の意義

- ・ 川を使った遊覧は萬代丸などがあり、アナスタシア就航後小阿賀野川などより拡大したものになっているがツアーといえる状況ではない。下流域の景観資源を掘り起こし活用したツアーとしていくには、景観八景など魅力のある名所の設定と認知が課題となる。
- ・ かつて新潟～長岡までの舟運は、安進丸やコウレンボウ、近年では砂利舟で行われていた。その記憶を持つ川沿いの住民が健在であること、川沿いから遠い山や日没の夕日、花畑、水鳥など自然景観が残されていること、新潟-分水の花見船のツアーが定番となる可能性があることなどが条件として有利である。
- ・ しかしながら、未知数の部分も多く、河川周辺での開発で景観が徐々に壊れ、規制のない建築物や画一的な河川改修で魅力の無くなりつつある景観という指摘もある。言い換えれば、流域の住民や企業、行政にとって河川景観に対する価値意識が不足しているとも言える。また、機能的には、接岸できる棧橋、船の通れる閘門等の問題、川砂利採取で航路の確保が容易でないこと、内水面漁業との調整が必要であること、河川の水質改善などツアーの魅力アップに関わる課題問題は多い。
- ・ 舟運ツアーの魅力の大部分は、舟旅を楽しむ景観である。その景観を調査し、八景などの名所起こし、名所づくりにつなげることが可能となれば新潟県観光の新たな付加価値付けとなる。さらに、舟旅で紹介され味わわれる新潟の旬の食材、酒などの時間をかけた宣伝になる。また、船内で下流域の歴史、景観、人物、音楽、絵画などを紹介するプロのガイドの登場を促すことになる。
- ・ 現在ツアーはチャーター便なので年数回のツアー時に効果が期待される。基礎調査によって、保全すべき景観、改善・育成・創造すべき景観、規制すべき景観、さらに掘り下げるべき景観が見えてくる。その扱いは行政や企業、住民、農業、漁業などの調整に時間を要するが、並行し、八景名所マップなどの舟運ツアーマップやCD、音楽などの商品化で訴求力は高まると思われる。
- ・ 景観は流域の暮らし、産業、行政、文化の総集編的なものであるからして指標は設定しにくい。景観への配慮が、川辺の自然や歴史資源の保全、川づくり、川辺の利用、川の清掃、川辺の緑や花畑の維持、橋や建築づくり、閘門や船着き場、都市のやすらぎ空間、オープンカフェなどの川辺の日常利用、色使い、セキュリティ施設など、ハード、ソフトの川の魅力づけから見た取り組みになっていくことなどトータルなものが指標となる。

1.3 調査研究の進め方

1.3.1 調査時期：2003年4月～2004年3月

1.3.2 調査対象：信濃川新潟市～長岡市まで約6.5km

船上からの景観対象物：水面、水際の自然、護岸等の構造物、橋、閘門、建築物など

1.3.3 調査対象者：舟運観光利用者、沿川住民、ウォーターシャトル操船者

1.3.4 調査協力者：写真家弓納持福夫、五百川清大川津資料館館長、大熊孝新潟大学工学部教授、松井ヒロ

1.3.5 調査体制：研究代表者 栗原道平 共同研究者 平田敏彦 中村文弘 相楽治 羽生英一 寺村淳 野口寛人 千田晋也

1.3.6 調査内容：

流域の基礎資料収集/現況資料、歴史的な資料、空中写真、アンケートなどのデータ四季の景観変化、色彩変化、物語性などを把握する。

現地踏査/流域を船上から、対岸から景観調査を行う。

景観特性などの分析/舟運ツアーでの景観類似事例を分類し研究する。

舟運ツアー景観事例研究/舟運ツアーでの景観類似事例を分類し研究する。

景観ポイントの抽出、ゾーン区分/下流域での景観名所の可能性あるポイントを整理する。同時に、ツアーとして連続する景観の特性などをゾーニングする。

景観活用課題の整理/マップや映像、ガイドブック等の可能性土地利用者や企業、行政など景観を守り育てる側への課題

基礎調査・診断報告書の作成